

令和3年6月12日付山陰中央新報



「巨人(ジャイアント)にきをつけろ!」(エリック・カール作・絵、もりひさし訳、偕成社)



「どうさんはタツノオトシゴ(エリック・カール作絵)のよう(訳、偕成社)

米国の絵本作家エリック・カールさんが、9歳で亡くなった。鮮やかな色彩の紙を貼り付けたコラージュ(貼り絵)が特徴の作品には、世界的なロングセラー「はらぺこあおむし」以外にも魅力的な絵本が数多い。松江、市浜乃木7丁目の絵本専門図書館・おはなしレストランライブラリーの協力で、一度は手に取ってほしいカールさんの絵本を紹介する。

(増田枝里子)

「はらぺこあおむし」だけじゃない!



「たんじょうびのふしぎながみ(エリック・カール作絵、もりひさし訳、偕成社)

エリック・カール絵本の魅力

カールさんが絵本制作でよく取り入れたのが「仕掛け」。各ページに切り込みの窓やドア、つまみなどがあがり、絵の中の食べ物に本物の穴が開いていたり、幅の違うページが並んでいたりと凝った仕掛けに引きつけられる。

「どうさんはタツノオトシゴ」も、仕掛けが秀逸。卵を守り、子育てをする父魚たちが、海藻やサンゴに隠れて卵を抱く様子を描くのにセロハン素材のページを挟んだ。めくると隠れた魚が登場する仕組みだ。「巨人にきをつけろ!」は、巨人に捕まった子どもたちが逃げながら冒険する話。各ページに切り込みの窓やドア、つまみがあり、遊び心をくすぐられる。「たんじょうびのふしぎながみ」は、★や▲や■など暗号のような印が書かれた手紙をもとに、プレゼントを探すストーリー。印刷と同じような形に切り取られたページが楽しい。カールさんの作品には動物や魚、虫など、さまざまな生き物が登場する。絵本という媒体を通して、子どもたちに楽しみながら知識をつけてもらいたいという狙いがあったという。

「ごちゃまぜカメレオン」は、カメレオンと別の動物の特徴を次々に混ぜていき、架空の生き物に変化していく内容。カールさん自身が子どもたちから受けたリクエストをヒントに、子どもたちの喜ぶストーリーが生まれた。

読み応えがあり、大人も引き込まれる「ことりをすきになった山」(アリス・マクレラン文)は、カールさんが挿絵を担当。荒野に立つこつこつした岩山が、小鳥と出会って変化していく様子を色鮮やかに描いている。

凝った仕掛け 多様な生き物

「やどかりのおひっこし」は、ヤドカリが新しい家を探し出すための仲間に出会い、生きるための知恵と自信を身に付けていく物語。体の成長に合わせてすみかを替えていくというヤドカリの生態が分かる。「ホットケーキできあがり!」は主人公がホットケーキを食べるため、小麦を刈り取り、粉にして、鶏から卵をもらい、牛乳を搾る。食べ物がいかなる過程を経て食卓に上ることを子どもたちに易しく語り掛けている。



「ことりをすきになった山」(アリス・マクレラン文、エリック・カール絵、ゆあさみえ訳、偕成社)



「ごちゃまぜカメレオン」(エリック・カール作・絵、やぎたよしこ訳、ほるぷ出版)



「ホットケーキできあがり!」(エリック・カール作・絵、アーサー・ビナード訳、偕成社)



「やどかりのおひっこし」(エリック・カール作・絵、もりひさし訳、偕成社)

エリック・カールさん追悼

島根県立大 岩田英作教授

「これ、弟と一緒に読んだ絵本です」
そう言つて、学生の一人が思い出の一冊として紹介してくれたのは「はらぺこあおむし」だった。かなりの年季が入つていて、食べ物の穴の部分は、兄弟でどれだけ指でほじほじしたこ

とか、いびつに大きく広がつていた。「一生取つておきたい、お二人の宝物ですね」。そんな

よき理解者と才能と

やりとりをしたのが、エリック・カールの訃報が届くつい10日ほど前の授業のことだった。「はらぺこあおむし」が1969年に米国で出版されたあと、これまで60以上の言語に翻訳され、世界中の子どもたちにほじほじされるようになるまで

告げられたのは、カールが絵を描くことを好み、しかもすばらしく上手であること、今後親としてその才能を見守り育ててほしいということだった。長い戦争の時代が終わわり、焦土と化したドイツで10代半ばを迎えたカールに、これからは美術を思い

には、カールの絵本作家としてのすぐれた才能はもちろんのこと、そこには彼のことをよく理解し支えた人々の姿があった。自伝「子どもの夢を追つて」、カールはそれらの人々について感謝の念と共に書きつづつてい

る。カールの絵の才能をいち早く見いだしたのは、彼が小学校に入学した時の担任の先生だった。ある日、カールの母は学校から呼び出され、とつさに息子の悪事を予想した母は見事に裏切られることになる。先生から

きり学ぶように勧めてくれたのは、ほかならぬ母だった。米国生まれのカールは、いま述べた担任の先生の一件から間もなく、両親の母国であるドイツに移住することになる。米国に比べてしつけに厳しいドイツ

の教育は、カールを学校嫌いにさせるのに十分だった。折しもドイツではヒトラーが台頭し、カールの周囲はナチスのハーケンクロイツで塗りつぶされていった。しかし、そんな中でも、カールは一人の美術教師によつて一条の光を見いだすこと

ができた。その先生は、ある日カールを自宅に招き、誰にも言わないように念押しして、ナチスによつて「墮落した芸術家」の烙印を押されたレオパルド・ス、フランクらの絵の複製を見せられたのである。カールは「目の前がくらくらするほどの衝撃」を受け、「これらの絵の自由さを覚えておくんだよ」という先生のひと言を胸にしまつた。



絵本「はらぺこあおむし」



いわた・えいさく
1963年、雲南市生まれ。島根県立大人間文化学近世文学部教授。専門は日本文学。松江大学図書館「おはなすしり」代表。島根県子ども読書活動推進委員会委員長。

大人になったカールは再び海を渡り、米ニューヨークでいよいよ絵本作家として歩み始める。そこでも「スイミー」などで知られる絵本作家レオ・レオニや優秀な児童文学編集者アン・ベネアユースたちとの出会いがカールの活動を支えた。
「はらぺこあおむし」は葉っぱの上に白い小さな卵が載っている場面から始まる。その中央にはひときわ大きな月が描かれていて、穏やかな笑みをたたえていた。そうしてはらぺこあおむしが誕生してからは、にっこり顔のお日さまがあおむしを温かく見守っていた。はらぺこあおむしは、けつしてひとりで大きくなり、見事なチョウに変身したわけではなかったのだ。

(敬称略)

エリック・カールさんは5月23日死去。91歳。

画面越しに松江緑が丘養護学校の生徒と交流する島根県立大の学生。松江市浜乃木7丁目、県立大松江キャンパス



画面越しに養護学校見学

松江 教員目指す島根県大生

島根県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）と松江緑が丘養護学校（同市上乃木5丁目）をオンラインで結んだ校内見学会が15日にあった。教職を志す同大保育教育学科の学生たちが同校の様子や授業風景を興味深げに眺め、生徒とも交流を深めた。

特別支援学校の教員免許取得のため必修の「知的障害児指導論」の一環。新型コロナウイルス禍の中、病弱な生徒が在籍する同校を訪ねるのは困難

島根県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）で現場の様子を体験する狙いがある。

保育教育学科の3、4年生計36人が参加。ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」と、連動して遠隔操作できるロボット「temi（テミ）」を使い、同校教員が校内を巡って生徒が機能訓練する「自立活動室」など特徴的な施設を紹介した。

学生はグループごとに映像が送られるタブレット端末を順番に操作。野菜の栽培、パソコンを使った名刺作成などに取り組む同校高等部の生徒とも面会し「育てている野菜の種類は」「名刺のデザインはどう考えるのか」など質問しながら学校生活の面白さや大変さを聞き取った。

同学科3年の泉有花さん（20）は「生徒と交流しながら校内を見られたのは良い経験になった。将来、教育現場に立つために生かしたい」と話した。

（中島 誠）

保育士就職 県西部で

県東部の養成機関 浜田で合同説明会

7月24日

保育士を志す学生を募ろうと、県立大人間文化学部と同短期大学部（ともに松江浜乃木7丁目）、大阪健康福祉短期大（同市西川津町）などが7月24日、県立大浜田キャンパス（浜田市野原町）で合同学校説明会を初開催する。これまで県西部では山陽方面に進学、就職する学生が多く、なり手不足が懸念されていた。県内養成施設で学んだ後の地元就職につなげる。

いずれも保育関連学科がある出雲コアカレッジ（出雲市斐川町富村）、トリニティカレッジ出雲医療福祉専門学校（同市西新町3丁目）の計5機関が参加。もともと、県西部や隠岐郡には保育士の養成施設がなく、志望者は県東部や山陽方面の学校に進み、その地で就職する傾向が強い。県が2018年に行った実態調査によると、17年4月に県西部の保育施設に配置された正職員は求人

53人に対し採用40人で、充足率は75・4%にとどまる。

説明会はこうした状況の中、高校生や既卒者向けに、現場の需要が多い県西部への就職を検討してもらおうと企画。当日は午後1時から各機関が個別ブースを設けるほか、県西部の各市町村担当者による進学、就職の支援制度の紹介も予定。卒業後の進路選択に生かしてもらおう狙いだ。

県立大短期大学部保育学科の宮下裕一学科長は「保育士のなり手を掘り起こすとともに、保育の魅力を広く知ってほしい」と話す。入場無料だが事前にフア

クスで参加申し込みが必要。問い合わせは大坂健康福祉短期大、電話0852

(67) 3716。

(中島諒)

大田市国際交流員

退任前に市の

広報大使委嘱

ブラジル・ベイガさん

ブラジル出身の大田市国際交流員のピビアナ・ベイガさん(34)が、退任を前にした29日、市の広報大使「島根おおだアンバサダー」に委嘱された。市は帰国後も



委嘱状を手に笑顔を見せるピビアナ・ベイガさん
|| 大田市大田町、市役所

ブラジルとの懸け橋となることを期待し、ベイガさんも大田の魅力発信へ意欲を

手

津・智
江邑

わせ

江津
瑞穂
13:00

ふるさとの
子どもたちへ

おもしろ サイエンス

しまね・つくば研究者ネットワーク



そのやま しげき
園山 繁樹

島根県立大学人間文化学部保育教育学科教授

話したいのに学校で声が出ない

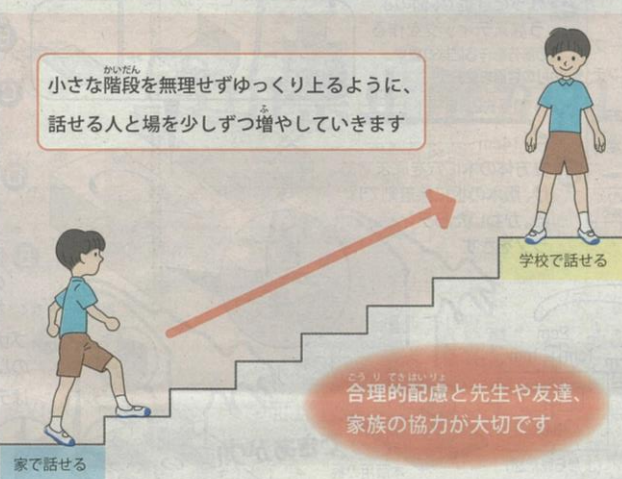
一緒にできる工夫で 困りごとを減らそう

私が研究しているのは「障害科学」です。障害がある人が幸せな人生を送るためにどんなことが必要なのかを研究しています。障害科学は、自然科学の他に社会科学や人文科学など、いくつかの学問分野にまたがるサイエンスです。今回は、家では話せるのに、学校では声が出なくなる「場面かんもく」という状態を紹介します。

学校では返事や発表、本読みなど、声を出す場面がたくさんありますね。そんな時、声を出すことができないとどうでしょう？ 朝の健康調べで「はい、元気です」と言えません。本は読めるのに、皆の前では読めません。答えがわかってい

ても声が出ません。先生や友達に伝えたいことがあっても声が出ません。「場面かんもく」の人たちには、学校で毎日こんな

小さな階段を無理せずゆっくり上るように、話せる人と場を少しずつ増やしていきます



学校で話せるようになるための工夫のイメージ図

■略歴

1956年、出雲市生まれ。高浜小、出雲三中卒。国立松江高専3年中退。大阪教育大学・同大学院で障害児教育を学び、筑波大学大学院博士課程で障害科学を専攻。博士（教育学）。筑波大学教授などを経て、2019年から島根県立大学教授。筑波大学名誉教授。日本場面緘黙研究会会長。

とはできます。たとえば、「はい、元気です」の代わりに手で「グー・サイン」を作る、ノートに書いた答えや作文を他の人に読んでもらう、答えを黒板に書く、本読みや歌は班の人と一緒にする、先生や友達にはメモで伝えるなどです。すると学校で困ることが減り、楽しくなります。これらの工夫は「合理的配慮」と呼ばれ、毎日の「困った」を減らすことができます。私は現在、学校で話せるようになる研究も進めています（図）。